

『するが有度山麓9条の会』NEWS

エネルギー―他人事？自分事？

大谷在住 吉田 綾子

この頃大谷のうちの近くでも、イソヒヨドリを見かけることが多くなりました。胸のところが青くて、いい感じの大きさの鳥です。なんでも沖繩などの南の方の鳥らしいのですが、気候の温暖化のせいでは生息域を伸ばしたのでしょうか？

温暖化といえば、それを食い止めるために、様々な方法が試みられています。地熱での発電や風力での発電も試みられています。

一方、伊東市では大型のパネルを立て並べる太陽光が話題になったこともあります。開発型のプロジェクトは環境への負荷が大きいということでしょう。

一方、ウクライナの戦争でドイツに送るガスパイプラインが止まってしまい火力発電もやむを得ないのではという風潮も出ています。

そんな中、日本では、政府が「原子力による発電をペースロードの一つと考える」なんてことを言いだしました。40年を超えた原子力発電所も再び動かしていくことを考え、さらに、新しい原子力発電所を立てることも視野に入っているようです。でも、でも、「ちょっと待った。」と言いたいのです。福島での重大な事故の原因は、究明されたのでしょうか？デブリとかいう燃料を安全に取り出して片付ける方法は見つかったのでしょうか？そして、増え続ける冷却水を海に流していくことに対し、海を糧に生きる方たちの意見を聞いたのでしょうか？全部疑問符が付きます。

先日の大雨の時、停電した所も多く、

不安を募らせて時間を過ごした人も多くいます。こんな時だからこそ、私たちは、うんと考え、次の世代の人たちが、鳥の声を耳を傾けることができるように知恵を絞らなくてはいけないなと思っています。

劫火の中になお生命ありて③

明泉寺14世住職 故水谷光子

三十分も眠っていたのか。頭巾を通して再び髪が燃え始めて、漸く目が覚めた。西側の火の手が少し弱くなっていた。『そうだ。建物が燃え尽きたら、火は消える筈だ。消さなくても消える時がくるのだ。自然に消えるその時を待てばよいのだ』私は大発見でもした気分浸った。こんな簡単なことも判らぬ程に、動揺し続けていたのだ。鉄筋のビルも、窓からの火は少し弱まり、建物そのものは、破壊されてはいないようだった。周囲の建物の火災もそれぞれ峠を越したようだ。『生き延びられるかも知れない』と一人頷き、急に希望と元気が身に満ちみちてきた。頭も少し冴えてきた。けれども、全身綿のようになんか疲れているし、体の節々が激しく痛む。よく考え、冷静沈着に判断して、体力を無駄に使わないことだ。墓地の中央当たりが、大分凌ぎよくなっている。墓石の色でそれと判る。暫くはここにしよう。火の勢いは、辺り一面次第に弱まり、何よりも呼吸が楽になった。『助かったのだ』とはつきり意識した。そして安心して、再び深い眠りに入ってしまった。

道路を歩く兵隊さんの靴音に目覚めた時は、夜が白々と明け始めていた。四時を少し過ぎていただろう。石塔にま

だぬくもりは残っていたが、熱くはななく色も常の色に戻っていた。空も煙や煙りは残っていて、昨日までとは違ったが、それでもとにかく、狂乱の一夜は完全に終わっていたのである。この夜明けの空への感動も、私にとって生涯忘れ得ぬものとなった。

すぐ近くに妹が眠っていた。意識もすぐに戻った。ひどい焼傷を負っているが、とにかく生きていてくれた。東側の角近くで、祖父が亡くなっていた。衣服も殆ど焼け、体の一部は骨が出ているという程の、実に無惨な焼死体であったが、端然と坐り合掌したまま、少しも姿勢が崩れていなかった。『何と素晴らしい信念・素晴らしい往生である』私は今もあの時の感動が蘇ってくるのを覚える。身動きの俣ならぬ祖父は、『逃げたくとも逃げられず』というより、『逃げる気』を全く持つことなろう。その場所から動かなかったのである。幼くして明泉寺の養子となり、荒廃した寺を守り、漸く建立できた本堂が、三十余年で劫火を浴びたのである。断腸の思いで本堂の焼け落ちるのを見届けながら、自らも息絶えたのであった。父はその隣で、扉に寄りかかって倒れていた。昏々と眠っていて、揺り起こしても目覚めない。着ていた国民服は、それ程焼けてはいない。途切れがちなが、脈は微かにある。吸う息はよく判らないが、吐く息はそれと判る。弱視と心臓弁膜症の体で、一晩を精一杯頑張り抜いた果ての姿であった。頭を打ったのである。血が滲んでいる。『どうして助けたらよいか』…。

人の気配を感じて、焼け落ちた木戸口から裏の道に出て、兵隊さんに助け

を求めた。この時は未だ、要所々々に非常線が張られ、外部からは一般の人が立ち入りできない状態だった。『ここから入って来たの』「ずっとここにいました」服装は焼け焦げ、髪は振り乱れている私の姿に、魂消した兵隊さんは、あの劫火の中に閉じ込められて、しかも生き延びている私の存在を、とても信じられないようだった。あれこれ聞かぬが今の私は、ゆっくり話しては欲しい。せき立てて、父を担架で病院に運んで貰うと共に、妹の救助も頼んだ。暫くして、別の兵隊さんが迎えに来て、妹は田町小学校の臨時救護所に担架で運ばれた。祖父の遺体に心を残しながらも、私は妹に付いて行った。その時は、瀕死の妹から離れられなかったのである。当然いる筈と思っていた父は、そこにはいなかった。父の安否と居場所を気遣いながら、どうにもならぬ私自身が、無性に歯痒かったのだ。

気になる値段

対戦車ミサイル「ジャベリン」はセツト価格6820万円(追加ミサイル2000万円)、ロッキード Trident II ミサイル一発37億円、ジェラルド・R・フォード CVN-78空母は1兆3千億円。

